

< 目次 >

1. 事務局より
2. 前年度編集責任より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任より
5. 例会予定
6. 談話会予定
7. 各地の研究会だより
8. 海外情報
9. 2024 年度収支決算報告
10. 編集後記

1. 事務局より

昨年度に引き続き 2025 年度も栗原唯(大阪大学)と高橋克欣(大阪大学)が事務局の運営を担当しております。事務局の住所およびメールアドレスは 2024 年度と同じです。

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8

大阪大学大学院人文学研究科

高橋克欣研究室内

日本フランス語学会事務局

belf-bureau@ml.office.osaka-u.ac.jp

(栗原唯・高橋克欣)

2. 前年度編集責任より

長年『フランス語学研究』の刊行は6月でしたが、frenchlingでお知らせしたとおり、今年から8月になります。これまでより2か月ほど後ろにずれることになったのは、査読者による審査と執筆者による修正にもう少し時間をかけることにしたからです。これは、とくに掲載論文の完成度を上げて学会誌の質をさらに高めるために講じた措置であります。ご理解のほど何卒よろしくお願いいたします。

学会誌についてはさらに変更点があります。次号から表記の統一の徹底を図ることにしました。「執筆要項補遺」ならびに「参考文献表記法」の増補改訂版がまもなくホームページに掲載されますので、投稿され

る方はそれらに基づいてご執筆ください。

このような方針変更は、私が編集責任になったから行うことにしたわけではありません。懸案事項に着手せざるを得なくなった年にちょうど私が編集責任に当たただけで、誰が編集責任になっていてもやらなければならないことでした。ちょっとした変革期に責任ある立場になりましたので、私には荷が重く、作業が滞ることもありました。それでも何とか任務を遂行できたのは、副編集責任の阿部宏先生をはじめ編集委員の方々のお力添えのおかげです。改めて心からお礼申し上げます。

さて、今年度は、福岡大学の山本大地先生に編集責任を務めていただき、私は副編集責任として補佐役に回ります。微力ながら、もう一年学会運営に尽力します。

(武本雅嗣)

3. 新編集委員より**◆川上夏林（広島大学）**

学部生のころ、図書館で偶然手にした一冊がロラン・バルト『モードの体系』でした。理解はできずとも、この本を通して言葉がもつ力に惹かれたことを今でも覚えています。この出会いが1つのきっかけとなって、徐々に言語構造や文法に関心が向くようになり、さまざまな文献に触れる中で、言語学に足を踏み入れることになりました。大学院進学当初より、「心」や「身体」に関連する言語現象に興味を持ち、最終的には心理動詞をテーマに、東郷雄二先生（京都大学名誉教授）と守田貴弘先生（京都大学）のご指導の下、心理動詞の意味構造に関する研究成果を博士論文にまとめました。現在もフランス語の心理動詞を対象に調査・研究を行っていますが、長期的には、類型論的観点を取り入れた心理動詞研究の新たな研究領域を模索することを目指しています。

関西圏、関東圏を経て、2024年度より広島で新たにフランス語教育に携わることになりました。コロナ禍で遠のいてしまった学生との交流が再び活発になり、対面で教育できることの利点と喜びを感じながら教壇

に立っています。学生からは日々、素朴な疑問が寄せられます。そのなかには答えに窮するものもたくさんあります。そのような疑問に出会う度に、研究の芽が教育の場にあること、そして他者と対話することが研究の活力になることを実感します。対話が重要であることは、これまでの研究活動で出会ったフランス語学会の方々との交流を通して学んだことでもあります。フランス語学会では研究発表の機会を数多くいただきました。育ての場である学会に、今後は、運営という立場で携わることができることを大変嬉しく思います。まだ経験の浅い身ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

◆西脇沙織（成城大学）

このたび編集委員として迎えていただきました、西脇沙織と申します。

私は、慶應義塾大学にて文学学士号、慶應義塾大学大学院にて文学修士号、フランス国立社会科学高等研究院にて言語学博士号を取得後、高校およびいくつかの大学での非常勤講師を経て、2024 年より専任講師として成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科に勤務しております。

研究に関しては、Jean-Claude Anscombre, Oswald Ducrot, Marion Carel らが発展させてきた論証意味論と呼ばれる理論的枠組みの中で活動しております。現在の研究対象は、自然言語における量子子です。とりわけ、beaucoup と tout について考察を進めています。論証意味論を専門とする研究者のグループにおいて、日本語話者は少数であるため、研究発表や論文執筆はフランス語で行うことが多くなっています。一方で、フランス語話者でない日本の読者にもフランス独自の言語観を知っていただきたいという願いから、日本語で論証意味論を紹介することを計画中です。

教育では、主として、言語学を専門としない人文学系の学生を対象とし、教養としての言語学を教えています。また、フランス語の語学科目も担当しております。

これからフランス語学会の編集委員として、学会の運営に携われますことを、大変嬉しく、また、光栄に思っております。微力ではございますが、フランス語学会の発展に貢献できるよう、精進して参ります。ご

指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

◆比内晃介（福岡大学）

僭越ながら、2025 年度より本学会の編集委員を担当させていただくことになりました。このような光栄かつ重要な役割への就任を承認して下さった編集委員会委員ならびに会員の皆様に心より感謝申し上げます。

元々国語科の教員になることを目指して大学に進学したのですが、偶然にも（いいえ、幸運にも！）第二外国語としてフランス語を選択したこと、そしてフランス語学の授業を通じて青木三郎先生や渡邊淳也先生をはじめ、素晴らしい研究者の方々と出会ったことをきっかけに、フランス語の研究に興味を持ち始めました。卒業論文では *verlan* と呼ばれる言語現象についての分析を行い、渡邊先生のご紹介で、その分析結果を東京フランス語学研究会で発表させていただいたのは、今でも心に残る大切な思い出です。未熟な研究発表にもかかわらず、参加者の方々から貴重なご意見やご質問、そして研究の道を進むことを応援してくれる温かいお言葉をいただき、感動したのを覚えています。

現在は、研究テーマを「フランスの若者ことば」に広げ、主に社会言語学のアプローチからフランスに住む若年層の言語使用を研究しています。博士論文では、フランスのグルノーブルとその周辺地域に位置する中等学校で調査を実施し、収集したデータをもとに生徒の持つ語彙レパートリーについての分析を行いました。また、これまでに Réseau francophone de sociolinguistique（通称 RFS）の研究大会に積極的に参加し、現在 RFS の会長を務めているエクス・マルセイユ大学のサミュエル・ヴェルネ氏をはじめ、フランス語圏の社会言語学者との交流を重ねてきました。そのため、編集委員としてフランス語圏における社会言語学の研究動向についての情報も積極的に発信できればと考えております。

未熟者ではございますが、編集委員として本学会の運営と今後の発展に貢献できるよう、日々精進していく所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

4. 本年度編集責任より

2025 年度編集責任を務めさせていただくことになりました、山本大地と申します。私が日本フランス語学会の編集委員に加わったのは 2015 年で、ちょうど 10 年が経過しました。担当する号数も、区切りの良い 60 号となります。私にとってのみならず、BELF にとっても節目の年に、編集責任という名誉ある役目をいただき、大変光栄に思うと同時に、未熟な私に務まるだろうかという不安もあります。しかし、聡明な学会員の皆様や編集委員の先生方のご支援をいただきながら、発刊に向けて気を引き締めてまいります。

BELF は、学会員の皆様の原稿によって成り立っているといっても過言ではありません。そこで、一層多くのご投稿をいただけるよう、この場をお借りして、私が感じている BELF および日本フランス語学会の魅力についてお話しさせていただきます。私が BELF と出会ったのは、20 年以上前の、大学四年生のときでした。フランス語を読むこともままならなかった私にとって、日本語でフランス語学の論考を読むことができる貴重な雑誌でした。数年後、私は自ら BELF に論文を投稿しました。その際、三名の査読者からいただいた厳しくも建設的なコメントは、非常に有益でした。採用の可否に関わらず、三名から詳細なコメントが得られることは、本学会誌の大きな特色の一つです。特に、投稿を迷われている新たな学会員の皆様には、強くお勧めいたします。BELF には、論文以外にも、萌芽的な内容を公表する研究ノート、単行本の内容を簡潔に紹介する新刊紹介など、いくつかの投稿ジャンルがあります。また、依頼原稿となりますが、国内外の学会、研究会を紹介する研究集会報告、素朴な疑問を Q&A 形式で解説するフランス語質問箱もあります。アイデアをおもちの方は、どうか身近な編集委員にお声かけください。

研究促進プログラムについても、少し触れさせていただきます。この企画は 2006 年にはじめて立ち上げられ、今回第三次のプログラムが終了しました。自分に取り組んでいるテーマを、統一テーマと関連付けることで新たな知見を得ることができる素晴らしい企画です。プログラムの成果は別冊として刊行されます。どの企画においても、幅広いテーマをカバーできるよう、呼びかけ人の方々の工夫がされています。私

も参加する機会をいただきました。発表の場でも、その後の打ち上げの際にも、他の研究者の方々とくだけた雰囲気交流でき、普段こうした機会をもたない私にとって大変貴重な体験でした。呼びかけがあった際には、長年の学会員の皆様も、新たに加わった学会員の皆様も、ぜひご参加ください（学会員は自分で企画を応募することもできます）。

先日学会員でない先生に、ある企画の依頼をした際、「歴史ある学会でお話をする機会をいただけて光栄です」とのありがたいお返事を頂戴しました。これまでの編集委員および学会員の皆様が、築き上げてきた信頼を改めて実感いたしました。次号も、この信頼にふさわしい内容を提供できるよう努めます。皆様のご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

（山本大地）

5. 例会予定

2025 年度例会は 4 月、6 月、9 月、12 月の 4 回開催されます。例会案内はホームページによるほか、メーリングリスト frenchling でも配信しています。例会はフランス語学会の会員以外の方でも自由に来聴することができます。入場も無料です。すべてハイフレックス形式またはオンライン形式での開催となりますので、事前に参加申込が必要になることがございます。例会案内をよく御覧ください。みなさまのご参加をお待ちしております。

発表については、フランス語学会の会員の方であれば、どなたでも発表することができます。特に事前審査はなく、申込順に発表が決まります。若手研究者からベテラン研究者までが集まり、研究交流のできるよい機会でもあります。研究成果を業績として公表したい、あるいは学会誌『フランス語学研究』への投稿を検討している方はどうぞ奮ってご参加ください。

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：

日本フランス語学会例会運営担当

reikai@list.waseda.jp

以下はニューズレター編集段階の 6 月 1 日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで確認してください。

第 350 回例会 2025 年 4 月 12 日(土) 15:00-18:00
 会場：山口大学 吉田キャンパス 人文学部棟 2 階
 第 3 講義室
 開催形式：ハイフレックス
 (1) 小澤南海 (久留米大学)
 「聞き取りやすいフランス語音声とは？
 —教材の難度予測とその応用可能性—」
 (2) 栗原唯 (大阪大学)
 「スポーツ実況における I モード表現としての
 <ça + 動作動詞>」
 司会：武本雅嗣 (山口大学)

第 351 回例会 2025 年 6 月 14 日(土) 15:00-18:00
 会場：青山学院大学
 開催形式：ハイフレックス
 (1) 小金井菜々葉 (武蔵大学学部生)
 「à l'avance と d'avance の差異に関する一考察」
 (2) 宮腰駿 (東京大学大学院)・田中優生 (東京大学
 大学院)
 「Heureusement que P の統語論的分析」
 司会：古賀健太郎 (青山学院大学)

第 352 回例会 2025 年 9 月 20 日(土) 15:00-18:00
 会場：青山学院大学
 開催形式：ハイフレックス
 (1) 宮脇玲奈 (関西学院大学非常勤)
 「テキスト構造の観点から見た大過去形—回想の
 半過去形に埋め込まれた大過去形—」
 (2) 中川亮 (東京大学大学院)
 「17-18 世紀のフランス語における複合過去形と
 副詞の共起：手紙コーパスによる再検討」
 司会：近藤野里 (青山学院大学)

第 353 回例会 2025 年 12 月 6 日(土) 15:00-18:00
 会場：福岡大学
 開催形式：ハイフレックス
 (1) パルカ・コランタン (大阪大学)
 「フランス語の ne・n'の省略を含んだ発話に対する
 母語話者の評価」
 (2) 梶原久梨子 (大阪大学)
 「N1 à N2 における à の機能と意味構造」
 司会：山本大地 (福岡大学)

6. 談話会予定

2025 年度の談話会を以下の要領で開催します。今年度は「悪い言葉」をテーマに、3 名のパネリストをお招きした講演と討論を企画しています。皆さま奮ってご参加ください。

日時：2025 年 10 月 5 日(日) 15 時 30 分～18 時 30 分
 形式：オンライン

テーマ：「悪い言葉をめぐって」

パネリスト：

和泉悠先生 (南山大学) 意味論・言語哲学

村中淑子先生 (桃山学院大学) 日本語学

楊鶴先生 (筑波大学大学院博士後期課程修了)

フランス語学

参加方法、講演タイトルなど詳細が決まりましたら、学会 HP, frenchling でご案内します。

(世話人：山本大地・古賀健太郎)

7. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生とフランス語教員が中心になって研究会を開いています。

会場は主に関西大学梅田キャンパスです。諸般の事情から、昨年度は開催されませんでした。今後はオンライン開催も含めて継続してゆく所存です。

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり、論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。発表を希望される方は、以下のアドレスまで気軽にご連絡ください。

大久保朝憲：tomonori@kansai-u.ac.jp

高橋克欣：k_takahashi.hmt@osaka-u.ac.jp

(大久保朝憲)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。原則としてオンラインで開催しますが、ゲストスピーカーを招いたり、他のプロジェクトと共催するなど、特段の事情がある場合には対面で開催します。

発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語（学）に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。昨年度のニューズレターで既報分以降は、つぎのような発表がありました。

第 60 回研究会

日時：2024 年 6 月 22 日(土) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

発表者：喜田浩平（慶應義塾大学）

題目：思考のフィギュールにおける「文法」
— 直言 (Licentia)・逡巡 (Dubitatio)・呪詛 (Imprecatio) —

司会：渡邊淳也（東京大学）

第 61 回研究会

日時：2024 年 11 月 3 日(日・祝) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

発表者：井上大輔（上智大学大学院）

題目：主張、および情報構造からみたフランス語とスペイン語における直説法と接続法の叙法選択

司会：渡邊淳也（東京大学）

第 62 回研究会

日時：2025 年 3 月 26 日(水) 14 時から 17 時

会場：東京大学駒場キャンパス 18 号館 4 階
コラボレーションルーム 3

(1) 発表者：八鍬守（青山学院大学学生）

題目：有音の h と共起しない声門閉鎖音について

司会：渡邊淳也（東京大学）

(2) 発表者：小金井菜々葉（武蔵大学学生）

題目：X à l'avance に関する一考察

司会：塩田明子（上智大学非常勤）

第 63 回研究会

日時：2025 年 4 月 26 日(土) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

発表者：田中優生（東京大学大学院）

題目：Gender-based classification of diminutives in French : A cross-linguistic perspective

司会：渡邊淳也（東京大学）

今年度、これ以降の予定は以下のようになっております。

第 64 回研究会

日時：2025 年 6 月 21 日(土) 14 時から 17 時

実施方法：オンライン

(1) 発表者：木村乙葉（明治学院大学学生）

題目：話し言葉における quand même に関する考察 — コーパス分析からみる機能変化と文法化の兆し —

司会：塩田明子（上智大学非常勤）

(2) 発表者：川瀬瑛美（東京大学大学院）

題目：希求用法に注目したフランス語とルーマニア語の条件法の比較

司会：渡邊淳也（東京大学）

第 65 回研究会

日時：2025 年 10 月未定

(1) 発表者：未定

(2) 発表者：未定

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

8. 海外情報

今回は, EHESS での一年間の在外研究から帰国されたばかりの大久保朝憲さんと, 現在 Université Sorbonne Nouvelle 博士課程にご留学中の谷澤まどかさんに寄稿をお願いいたしました。

◆EHESS (パリ社会科学高等研究院)

勤務先の関西大学の「学術研究員」制度を利用して、サバティカルをみとめられ、パリの École des hautes études en sciences sociales (EHESS) にて、2024 年 4 月より 1 年間、自由な研究活動に従事することができました。受入研究者は同校のマリオン・キャレル Marion Carel 氏にお願いし、快諾を得ました。

同校は、数年前にパリ中心部から移転し、オベルピリエの広大なキャンパス敷地内に新たに居を構えましたが、メトロの運行圏内にぎりぎり含まれるとはいえ、便利な立地とは言いがたく、行き帰りは多少とも憂鬱ではありました。

にもかかわらず快適な研究生活を送ることができたのは、M. キャレル氏のあたたかいお人柄による部分が大きく、それは、氏の指導を受けるドクトランたちがしばしばみせる、氏に寄せるあつい信頼感からも見てとることができました。

キャレル氏の担当するセミナーのタイトルは以下のように銘打たれていました。

- Philosophie linguistique et sémantique argumentative
- Linguistique et histoire. Agir avec les mots
- Avoir le dernier mot. Correspondances, tracts, théâtre

このように、分析対象として選ばれるコーパスもかなり自由な範囲にわたるようになったように思われます。

またキャレル氏らは、EHESS の CRAL (Centre de recherches sur les arts et le langage) というセクションに所属しています。CRAL 主催の研究会、コロックなども、しばしば外国の研究者も招くかたちで活発に行われ、中教室規模の会場は毎回盛況です。研究会のテーマとしては、以下のようなものがありました。

- Au-delà de la face sensible de la signification
- La linguistique française des dix dernières années : analyse des mots et analyse de textes
- Formes et manifestations de l'intensification - Un seul phénomène ?

以上のように、EHESS – CRAL は、フランスの言語研究機関として現在も、世界各国からの研究者、研究グループを受け入れる中心の 1 つであり続けていると考えます。

(大久保朝憲)

◆ソルボンヌ・ヌーヴェル大学

私は、名古屋外国語大学で学士号を、東京外国語大学で修士課程を修了した後、JASSO の海外大学院学位取得型奨学金 (以下、JASSO 奨学金) を受給し、Florence Lefevre 先生の指導の下、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学の言語科学博士課程 (École doctorale 622, 以下 ED622) および研究科 CLESTHIA – Langage, systèmes, discours (EA 7345, 以下 CLESTHIA) に 2021 年 12 月より在籍しています。

博士論文では、話し言葉における統語論 (syntaxe à l'oral) の観点から、*-ment* 型副詞が非動詞文 (非動詞発話単位) を構成し、同意マーカーとして機能する現象について、話し言葉コーパスを TXM という分析ツールを用いて分析・記述しています。

2023 年 9 月からは 2 年間の任期で CLESTHIA の博士課程学生代表を務め、研究科の運営にも携わっています。また、同時期よりソルボンヌ・ヌーヴェル大学の Littérature et Linguistique Françaises et Latines 学部 (以下 LLFL) にて学部生向け授業も担当しています。

本稿では、奨学金制度、ED622 および CLESTHIA での研究活動、LLFL での教育経験、そして博士論文執筆にあたり使用したコーパス分析ツール TXM についてご紹介いたします。

1. 奨学金制度

前述の通り、フランスで博士課程に挑戦するにあたり、JASSO 奨学金より授業料および生活費 (月額 148,000 円) を 3 年間支援していただきました。博士課程の学生には、大学等の研究契約 (contrat doctoral) に基づく給与を得るか、JASSO 奨学金のような制度を利用し 3~4 年で博士号取得を目指すケースと、研究契約や奨学金がない場合にフルタイムで働きながら 5~6 年かけて博士号を取得するケースの 2 通りがあります。フルタイムで働く場合、多くは大学にて ATER (Attaché temporaire d'enseignement et de recherche) として授業を持つ、通訳・翻訳業に従事する (主に Traductologie 専攻の学生)、あるいは CAPES (中等教育教員資格) 試験に合格して中学校・高校で教員として働くといった選択をしています。

フランスの博士課程に進学するにあたっては、渡仏

当初からフルタイムの契約職を得るのは容易ではありません。そのため、JASSO 奨学金のような制度を利用して渡航することは、実質的に必須といえるでしょう。実際、博士課程への登録の際には、奨学金の有無が重要な確認事項のひとつとされています。とはいえ、円安や物価上昇の影響もあり、JASSO 奨学金のみで生活するのは難しいのが現状です。そのため、他の奨学金との併用、大学での非常勤講師 (vacataire) としての授業担当、試験監督や大学付属図書館でのアルバイトなどにより生活費を補う必要があります。

2. ED622 - CLESTHIA での研究活動

博士課程に進学すると、まず研究分野に応じて École doctorale に所属し、加えて指導教員の所属に応じた研究科にも所属します。私の場合、ED622 と CLESTHIA の両方に所属しています。

ED622 では、博士課程修了の要件として 150 時間分のセミナーまたは学会への参加、および研究倫理に関するセミナーの受講が義務付けられています。近年までは Université Paris Cité と ED622 の間でセミナーの互換制度がありましたが、現在はその統合関係が解消に向かっていると聞いています。それでも、Université Sorbonne Nouvelle と Université Paris Cité の学生間の交流は続いており、年に一度 Rencontres Jeunes Chercheurs (RJC) という学生主催の研究会や、博士課程学生による講座 Atelier autogéré などが開催されています。私も、コーパス分析ツール TXM に関するアトリエを 2 年間にわたり ED622 の博士課程の学生向けに開講してきました。

CLESTHIA には、談話分析、通時的研究、社会言語学、言語習得研究の 4 つの研究軸があり、それぞれの軸には研究費補助を受けたプロジェクトがあり、外部研究者を招いた研究会が定期的に行われています。また、年に一度 Journée d'étude CLESTHIA および Journée d'étude CLESTHIA – doctorants が開催され、CLESTHIA 所属者研究者および博士課程学生が研究成果を発表し、フィードバックを得る機会が設けられています。これらの研究会を通じて、発表経験だけでなく、学会の企画・運営経験も積むこともできます。

海外で開催される学会やフィールドワークへの参

加費用については、ED622 および CLESTHIA の両方から補助 (上限おおよそ 1,000 ユーロ) を受けることが可能です。

また CLESTHIA の博士課程学生代表として、Journée d'étude CLESTHIA – doctorants の運営補助、博士課程学生の移動費支援申請の促進、予算決議への参加などを担当し、研究経費管理や大学の組織運営について学ぶ貴重な機会を得ることもできました。

3. LLFL での教職経験

博士論文の進捗を定期的に確認する Comité de suivi の面談にて、教職経験を積むことの重要性を指摘されたこと、そして指導教員の推薦もあり、2 年前から LLFL にて学部生向けの授業を担当しています。

私は、Chargé de cours vacataire (非常勤講師) として年間契約で、週 1~2 コマ (1 コマあたり 1 時間半~2 時間) の授業を受け持っています。他の博士学生の中にはより多くの授業を担当する者もいますが、研究時間の確保の観点から 2 コマ程度が適切だと考えています。

これまでに担当した授業は、学部 1 年生向けの「言語学概論」(前期開講) および「統語論入門」(後期開講) で、各クラス 35~45 名程度を担当しました。今年度は、学部 3 年生向けの「従属節」に関するオンライン授業も 1 コマ担当しました。

授業準備や試験問題作成に時間を要し、主張の強い学生とのやり取りに苦勞することもあります。生活費を補えるという実利的な面に加え、将来のキャリアを見据えた際にも博士課程中に教育経験を積んでおくことは重要だと感じています。

4. TXM - コーパス分析ツール

TXM (<https://txm.gitpages.humanum.fr/textometrie/>) という分析ツールは、Lefeuve 先生のゼミで初めて知りました。ED622 の博士課程学生の中には、コーパスを一から構築したり、既存のコーパスを使用して言語分析を行う人が多くいます。

コーパスを一から構築する際には、Transcriber (<https://trans.sourceforge.net/en/presentation.php>)、ELAN (<https://archive.mpi.nl/tla/elan>)、Oxygen XML Editor (<https://www.oxygenxml.com/>) といった書き

起こしと構造化を可能にするツールの使用が推奨されています。既存コーパスを利用する場合も含め、TXMのような分析ツールの活用が広く求められています。実際、私が2年間にわたり開講しているTXMのアトリエに参加する学生の多くが、指導教員からこのツールを使うよう勧められて来ていることから、その重要性がうかがえます。

また、他大学ですが修士課程の学生向けに Corpus outillé 入門授業の講師募集があることや、ポスドクとしてプロジェクトに採用される際にも、こうしたツールへの習熟度が重視されるようになっているようです。

TXMの強みとしては、複数のコーパス(異なるプロジェクトで収集されたものを含む)を統合し、サブコーパスを作成できる点、単純な語検索だけでなく、TreeTagger (<https://www.cis.uni-muenchen.de/~schmid/tools/TreeTagger/>) という拡張機能による統語範疇からの検索、CQL (Contextual Query Language) による詳細な文字列検索が可能な点、また Transcriber で転写されたファイルに対応し音声を再生しながらの分析ができる点などが挙げられます。書き言葉・話し言葉の双方に対応可能であり、非常に汎用性の高いツールです。

以上、博士課程を進める中で、積極的に周囲と関わりながら得てきた情報や経験を簡潔にまとめました。本稿が、フランスの大学院における研究活動の現状をお伝えする一助となれば幸いです。

(谷澤まどか：ソルボンヌ・ヌーヴェル大学
博士課程)

9. 2024年度収支決算報告*

収入の部	(単位 円)
会費	598,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	56,000
預金利息	28
小計	745,028
前年度繰越金	3,295,159
計	4,040,187

支出の部

BELF58号印刷代金	473,624
BELF59号編集実費	0
発送費・通信費	84,548
特別発表(講演)謝金・交通費	90,000
事務消耗品費	13,976
振込手数料	23,576
ホームページ管理費	9,093
施設使用料	46,860
言語系学会連合年会費	10,000
小計	751,677
次年度繰越金	3,288,510
計	4,040,187

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	4,784
(三井住友銀行定期預金)	2,008,525
郵便貯金 (普通)	38,884
(振替)	1,231,014
現金	5,303
計	3,288,510

* 2025年3月31日現在の収支決算報告。6月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-8
大阪大学大学院人文学研究科
高橋克欣研究室内
日本フランス語学会

♪ 学会誌『フランス語学研究』は今年度から8月刊行となります。

10. 編集後記

今年もニューズレターを皆様に無事お届けできる運びとなりました。今回は、気鋭の3名の新編集委員の方たちから着任のご挨拶をいただいたほか、大変ご活躍の教員と院生の方にフランスでのホットな研究状況をお伝えいただきました。本紙面の記事の盛り上がりは、日本フランス語学会の学会活動自体の盛り up を反映するものであることを今更ながら実感しております。原稿をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。(奥田智樹)